設楽発掘通信

No.44
平成31年
1月号

滝瀬遺跡の現地説明会で二百七十五名が参加しました。

去る平成三十年一二月八日（土）に滝瀬遺跡で現地説明会を開催しました。一一月一〇日（土）に開催しました地元説明会に次いで滝瀬遺跡では二回目の説明会となりましたが、「九千年前の縄文集落が発見された」という記事が中日新聞や東愛知新聞などに掲載されたこともあり、二百七十五名という大勢の方々にご参加いただきました。ここ数年で当センターが開催した説明会としては最多の見学者となり、盛況のうちに終えることができました。

さて、平成三十年度の設楽ダム関連の遺跡発掘調査は、この一月に終了いたします。本発掘調査Bとして調査を進めてきました八橋地区の滝瀬遺跡と川向地区の石原遺跡の他に、本発掘調査A（いわゆる範囲確認調査）として大名倉地区のハラビ平遺跡と八橋地区の中村遺跡も十二月前半に発掘調査しました。滝瀬遺跡では縄文時代草創期末から早期前葉の竪穴建物を中心とする集落跡などが、石原遺跡では縄文時代中期前半の竪穴建物を中心とする集落跡などが確認されました。また、ハラビ平遺跡では縄文時代や平安時代の遺物が、中村遺跡では戦国時代の遺物が出土しました。調査に際しては、多くの皆様のご協力とご支援をいただきまして、無事に作業を終了することができました。ありがとうございました。

なお、毎年恒例となりました成果報告会「新設楽発見伝五」を三月二日（土）に開催する予定です。会の詳細については次号でご案内いたしますが、多くの方のご参加をお待ちしております。

（愛知県埋蔵文化財センター　鈴木正貴）

写真１　滝瀬遺跡の現地説明会の様子

発掘調査成果報告会『新設楽発見伝五』のご案内

日時：平成三十一年三月二日（土）午後一時～午後四時
（受付開始午後〇時三十分）
会場：設楽町田口特産物振興センター
（設楽町田口字向木屋三番地一号）
内容：平成三十年度に行われた発掘調査成果の報告と関連する講演会など。出土遺物・写真の展示。
その他：参加は無料です。※二月号に、詳細な内容をご案内いたします。
愛知県埋蔵文化財センターのホームページ、または
電話（〇五六七-六七-四一六三）でご確認ください。

滝瀬遺跡の調査

写真２　滝瀬遺跡遠景（南から）

七月から始まった滝瀬遺跡の調査が終了しました。

今年度の滝瀬遺跡の成果としては、調査区中央の十八Ｂ区で、縄文時代草創期末から早期前葉（約一万二千年前から九千年前）の竪穴建物跡群（写真２）がみつかったことが挙げられます。その一基から出土した炭化物を年代測定すると、少なくとも約九千年前まで遡る可能性があります。竪穴建物跡群は、おおよそ南向きの緩斜面上にあり、眼下には境川が流れています。平面形状はすべて円形で、中からは縄文土器片や剥片などが多く出土しました。

そのほかの成果として、調査区南東側の十八Ｃ区で、縄文時代後期から晩期（約四千四百年前から三千年前）の石囲炉、石刀（祭祀具）を伴う土坑、縄文時代早期（約一万一千年前から七千年前）ごろの集石遺構七基がみつかったことや、十八Ｂ区で集石遺構二基、縄文時代後期の土器を敷いた遺構がみつかったことが挙げられます。

また、遺跡北西側の調査区十八Ａ区では、平安時代の竪穴建物跡（写真３）一基や、複数の土坑がみつかりました。竪穴建物跡には北壁の中央にカマド（写真４）が設けられており、両側壁には石が立てられています。また、カマドの内部には平担な石が敷き詰められており、灰釉陶器や土師器（素焼きの土器）の甕などがみつかっています。竪穴建物の形状は、南側が現代の削平により残っていませんが、方形であったと考えられます。（安西工業株式会社　髙木祐志）

写真３　18A 区竪穴建物跡（南西から）

写真４　カマド拡大（南西から）

石原遺跡の調査

石原遺跡では、埋め戻しも済み、すべての工程が完了しました。準備期間も含めると延べ七ヶ月に及ぶ調査となりました。土石流に由来する砂礫層に覆われた本遺跡の掘削は大変な作業で、酷暑と呼ばれた今夏の厳しい環境の下、全員で流した滝のような汗が今でも忘れられません。

調査区西側（十八Ｂ区）では、縄文時代中期前半（約五千五百年前）の遺構や遺物がみつかったことを前号までに紹介してきました。特に、調査の終盤にとても多くの土器片が出土しており、西端部に位置する土坑三〇三ＳＫからは、大きな土器片がまとまってみつかりました（写真５・６）。整然と並べられているようにも見えるこれらの土器片は、おそらく同一個体です。土器の内面・外面同士が向き合うように交互に重なっていたことから、そこに置かれていたか埋められていたものが単純につぶれたのではなく、当時の人が割ってそこに置いたか埋めたものである可能性が高いと考えられます。周囲も含めると非常に多くの土器片がみつかっていることから、ここでお祭りのようなことが行われていたのかもしれません。はたして写真の土器がどのような形に接合・復元されるのか、期待が増すばかりです。（安西工業株式会社　鷺坂有吾）

写真５　土坑 303SK 上層遺物出土状況　南西から

写真６　土坑 303SK 下層遺物出土状況　南西から

ハラビ平遺跡・中村遺跡の調査

大名倉地区のハラビ平遺跡と八橋地区の中村遺跡で、本発掘調査Ａが実施されました。これは遺跡の範囲や遺構・遺物の有無を探り、将来的に広範囲に行う本発掘調査Ｂの必要性を確認するための調査です。両遺跡とも、それぞれが接している県道より一〇～三〇ｍ上に登った地点に位置する緩斜面部分を対象に、人力あるいは重機を併用して、一ｍ×二ｍもしくは二ｍ×二ｍの試掘坑を設定して、掘削が行われました（写真７・８）。

ハラビ平遺跡では、計五か所を掘削した結果、一部で遺構と平安時代の灰釉陶器・縄文土器・剥片がみつかりました。中村遺跡では、計八ヶ所を掘削した結果、遺構は確認されなかったものの、中世（戦国時代）の陶器（擂鉢）や山茶碗がみつかりました。

今後、これらの調査結果をまとめ、この先の対応について検討されることになります。

（安西工業株式会社　鷺坂有吾）

写真７　ハラビ平遺跡　人力掘削　南西から

写真８　中村遺跡　重機掘削　北西から

滝瀬遺跡出土の石器について

滝瀬遺跡十八B区では、二頁にあるように、縄文時代草創期末～早期初頭（今から九千年前を遡る頃）の、縄文時代の古い段階の集落跡が調査されました。出土遺物には、縄文土器のほか、狩猟や解体を行う際に使われた石鏃や削器（ナイフのように物を切ったり削ったりする道具）・使用痕ある剥片のほか、それらを製作するもとになった剥片・石核類、さらには堅果類などの加工に使われた磨石・敲石類および石皿・台石類が多量に出土しています。ここではこの中でも削器について詳しくご紹介します。

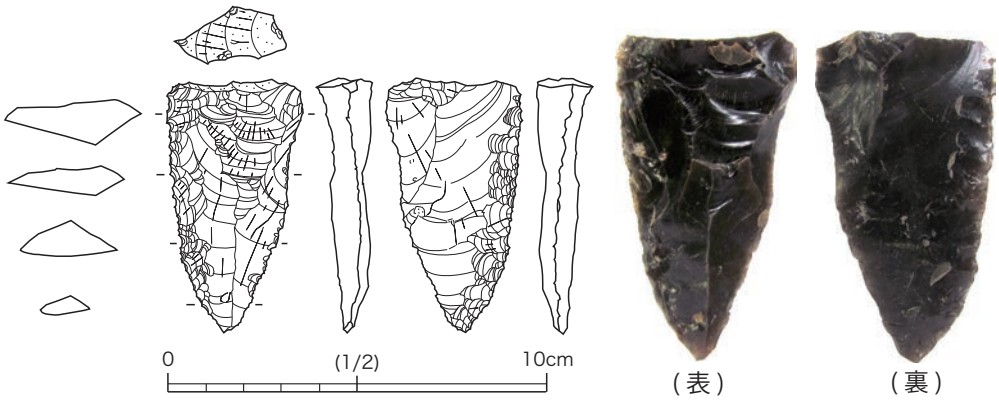

図１　滝瀬遺跡出土の削器

図１は、黒曜石製の削器です。長さ六・七cm、幅三・六cm、厚さ一・五cm、重さ二四・二gをはかるものです。鋭く尖った三角形状を呈するもので、その一辺には剥離調整を加えて、刃部が作られています。写真（表）の中央に走る稜線の上には、やや磨滅したような痕跡が確認されます。また、写真および図で示す上面は、やや風化の進んだ剥離面となっています。

石鏃や削器などは剥片から作られる石器です。草創期末～早期初頭の資料群の中では、溶結凝灰岩や安山岩などの石材利用が主体で、黒曜石の使用は限定的であったようです。石器の製作に関わる剥片・石核類の中にも黒曜石は見当たりませんので、この製品自体が外から当地に持ち込まれたものと考えられます。

愛知県内の後期旧石器時代には、ナイフ形石器や掻器、削器などの一部の石器には黒曜石が使用されていたものの、使用石材の主体はチャートや溶結凝灰岩でした。そうしたなか、名倉地区で調査された市場口遺跡では、多数の黒曜石塊が出土しており、特筆されます。

縄文時代以降、黒曜石は石鏃に多用される傾向がある一方、石鏃以外の石器として用いられることは極めて稀です。また、縄文時代中期～後期にかけて、西地・東地遺跡のように、石核など大きな塊として出土する事例があります。このような黒曜石のあり方は、石材としての利用や流通を考える上で、注目すべき事例ではないかと考えています。

近年では、黒曜石などの石器石材については、蛍光X線による理化学的な分析によって、産地を推定することが行われています。この資料は、まだその分析を行っておらず確実なことはいえませんが、長野県下諏訪町の星ヶ塔など信州産の可能性が高いのではないかと推測されます。

（愛知県埋蔵文化財センター　川添和暁）

設楽発掘通信 No.44
平成31年1月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話　（0567）67-4161【管理課】　4163【調査課】
ホームページ　http://www.maibun.com
Facebook　https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter　https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　安西工業株式会社